

はじめに

前回は語彙指導に有益な topic vocabulary list の作成のために学習者コーパスを活用した事例を紹介したが、今回はもう少し英語学習者の言語習得過程に注目して、一例として基本動詞を実際の英作文などでどのように使いこなしているかをネイティブ・スピーカーのデータと比較して検討してみよう。

基本動詞 make の習得過程

英語の基本動詞 make を例として、学習者コーパスにおける make の使用状況を、ネイティブ・

スピーカーのものと比較してみよう。それによって、目標言語のネイティブ・スピーカーの使用方法とどのような点で異なるか、また学年を追って make の用法がどのように変化していくのかといった点に考察を加え、学習者コーパスが第2言語習得過程の記述にいかに関与するかを見てみることにしよう。

今回の分析は、まず東京学芸大学大学院英語教育学講座のホームページで公開を始めている基本動詞の文型・コロケーション頻度リストをもとにしている。これは、私の指導の下、現在大学院2年の桃井秀知君が整備しているデータで、COBUILD Direct (5000万語の現代英語コーパス)のサービスからランダムに抽出した5000行のコンコーダンスラインにタグ付けをして、動詞型

PATTERNS	COBUILD Direct		TGU Learner Corpus	
	FREQ	%	FREQ	%
<i>make NP (PP)*</i>	2641	55.23%	212	62.72%
<i>make NP Adj.*</i>	708	14.81%	42	12.43%
<i>make NP do*</i>	463	9.68%	27	7.99%
<i>make NP NP</i>	246	5.14%	15	4.44%
<i>make Adj. NP*</i>	198	4.14%	0	0.00%
<i>make N of NP*</i>	92	1.92%	2	0.59%
<i>make up NP, make NP up, make up (be) made in place</i>	85	1.78%	6	1.78%
<i>be made of NP</i>	53	1.11%	4	1.18%
<i>be made from NP</i>	42	0.88%	2	0.59%
<i>make up NP of NP</i>	36	0.75%	0	0.00%
<i>make for NP</i>	28	0.59%	0	0.00%
<i>make NP into NP</i>	23	0.48%	0	0.00%
<i>make NP done</i>	20	0.42%	0	0.00%
<i>make NP out, make out NP</i>	20	0.42%	0	0.00%
<i>make of NP</i>	14	0.29%	0	0.00%
<i>make up for NP</i>	13	0.27%	0	0.00%
<i>make room for N</i>	11	0.23%	0	0.00%
<i>make or break</i>	9	0.19%	0	0.00%
<i>make do PP</i>	7	0.15%	0	0.00%
<i>make way for N</i>	7	0.15%	0	0.00%
<i>make good</i>	3	0.06%	0	0.00%
<i>make off with NP</i>	3	0.06%	0	0.00%
<i>make off</i>	1	0.02%	0	0.00%
TOTAL	4782	100.00%	338	100.00%

表1 make の文型パターン使用頻度の比較

学習者コーパスと

頻度、動詞型内の語彙コロケーションの頻度リストをほとんど手作業で作成した労作である*1。

make の動詞型の使用状況比較

このような手順にしたがって作成された動詞 make の COBUILD Direct での使用頻度リストと学習者コーパスのデータを比較したものが前ページの表1である。この表を見る限りでは、上位の動詞型の使用頻度はほとんどネイティブ・スピーカーと似たような割合である。違う部分と言えば、make が SVOC の文型で用いられるものが若干少ない分 SVO の構文の頻度が高いこと、be made... という受動態の用法が学習者に多く見られることであろう。またリストの下半分の表現は make のかなり高度な慣用表現で学習者がほとんど使いこなせていない。

それでは上位の使用頻度の高い動詞型で何かネイティブと英語学習者で典型的な相違点はないだろうか？ 実は、動詞型頻度パターンだけを眺めていては見落としがちなのが、パターン内の具体的な語彙コロケーションを抽出することで見えてくる。表2は、make + NP + (PP) のパターンで実際にどのような名詞が用いられたかを見たものである。また表2の上位の名詞が学習者コーパスの各学年のデータにどの程度現れているかを表わしたものが表3である(1度でも現れているものには+の記号を入れてある)。

語彙コロケーションの習得度

これを見ると、ネイティブが使う make + NP の

WORDS	JH2	JH3	SH2	WORDS	JH2	JH3	SH2
decision	-	-	-	effort	-	-	+
money	+	+	+	sound	-	-	-
difference	-	-	-	film	+	+	+
mistake	-	-	+	movie	+	+	+
sense	-	-	-	breakfast	+	+	+
food	+	+	+	friends	+	+	+
comment	-	-	-	story	+	+	+
progress	-	-	-	stage	+	+	+
change	-	-	-				

▲表2 make NP の名詞コロケーション (Source: COBUILD Direct)

◀表3 make + NP の語彙コロケーションの比較

フレーズは make decision [difference | mistake | sense | progress | change | effect] といった「make + 抽象名詞」で「~する」という意味になるものが高頻度で出現する。それに対して、日本人学習者の用いる make の目的語に来る名詞には movie, story, breakfast, film などのように具体的な名詞が多く、ほとんど「~を作る」という意味である*2。

N	FREQ	%
TOTAL	2641	100.00%
decision	122	4.62%
money	88	3.33%
difference	82	3.10%
mistake	58	2.20%
sense	56	2.12%
food	46	1.74%
comment	36	1.36%
progress	36	1.36%
change	35	1.33%
effort	34	1.29%
sound	34	1.29%
film/movie	31	1.17%
profit	31	1.17%
point	30	1.14%
debut	29	1.10%
contribution	26	0.98%
choice	25	0.95%
call	24	0.91%
move	24	0.91%
payment	24	0.91%
contact	21	0.80%
appearance	20	0.76%
arrangement	20	0.76%
drink	20	0.76%
love	19	0.72%
trip/journey/voyage	19	0.72%
attempt	17	0.64%
claim	17	0.64%
offer	16	0.61%
statement	15	0.57%

英語指導

.....(4) 基本動詞の習得状況調査

words 投野由紀夫

このことから少なくとも高校生程度までの日本人学習者は *make* の用法としては「作る」という基本的な意味の部分のみの習得にとどまり、「*make* + 抽象名詞」のようなネイティブのよく使う表現が使いこなせないという特徴があることが分かる(投野・桃井 1997)。

make + Adj + NP というパターンがネイティブでは高頻度なのに日本人学習者ではほとんど出てこないのもこれと関連がある。*make sure* [*clear, certain, good*] などのフレーズは日本人学習者にとって使いこなしの難しいものに入ることがわかる。

教科書のインプットの影響

このような *make* の用法の習得状況は当然どのように *make* という動詞を導入しているかにもよる。表4は現行の中学校教科書全社のデータから *make* の使用例を抽出、分類したものである。

これを見ると、「*make* + 抽象名詞」のパターンは極めて限られた表現しか現れておらず、中学レベルではほとんどインプットとして与えられていない。逆に、受動態の *be made in Japan, be made of wood* のような表現が頻出しており、これが学習者コーパスでも受動態がネイティブの頻度より高かった一因ではないかと思われる。

中学では別に *make* の基礎的な意味として「作る」を教えるだけでもかまわないかもしれない。問題はその後、語彙習得が進んでいく中でより *target-like* な用法へ習得が移行していくかどうかである。基本動詞は他の単語と連結し合っ、文を作る上でも中心的な要素であり、中級・上級レベルの学習者には「語彙の深化」という意味で今回のような資料をもとにした、ネイティブとの

ギャップを埋めるような表現活動の工夫や辞書などの用法記述が必要になってくるだろう。

L1 / L2 比較語彙データベース構想

このような基本動詞の使用頻度の *profile* を作成すると同時に、それを学習者コーパスと比較したものをデータベース化することで、今後の教科書・教材作成、辞書執筆、語彙中心のシラバス作成などに有効な情報を提供できる。そこから発展して、主要な名詞、形容詞、副詞などの内容語にデータベースの枠を広げていけば、かなり包括的な語彙習得の比較データベースができあがる。これは第2言語習得研究のデータとしても非常に価値ある資料になるだろう。この種のアプローチは徐々に海外でも行なわれてきているが、学習者コーパスを習得段階別にもっと整備しないと有効なデータベースが得られないであろう。今後のますますの研究が期待される分野である。

〈参考文献〉

投野由紀夫・桃井秀知 1997 「学習者コーパスによる日本人英語学習者の基本動詞の用法の発達の研究 - *make* を例として」 関東甲信越英語教育学会第21回千葉大会口頭発表

*1 桃井氏による基本動詞 *make* の分析の詳細は以下のURLを参照: http://www.u-gakugei.ac.jp/~m971310/Verb/mk_main.htm

*2 TGU Learner Corpus のデータはトピック的にまだ偏りがあるので、今回のコロケーション頻度もトピックの影響を若干受けている可能性があり、今後の整備を待って再検証が必要だ。

(とうの・ゆきお / 元東京学芸大学講師

ランカスター大学博士課程在籍)

PATTERNS	FREQUENCY	%
<i>make</i> NP (<i>crane, machine, pie, etc.</i>)	49	52.15%
<i>be made in / of / from</i> etc.	18	19%
<i>make</i> NP Adj (<i>him happy, etc.</i>)	11	11.72%
<i>make</i> NP (<i>mistake, debut, move, etc.</i>)	8	8.54%
Idiomatic (<i>make friends with, etc.</i>)	6	6.41%
<i>make</i> NP NP (<i>it a better place</i>)	1	1.09%
Phrasal verb (<i>make up</i>)	1	1.09%
TOTAL	94	100%

表4 中学校英語教科書の *make* のパターン分布

